



で「スナークリル」南園のころ、「---」  
 左どの音楽をやる事が出来た。生徒募集の  
 ボスターを一往きの小巻袋へはりに行ったりし  
 た。大抵に料はもらえなかつた。ヤリコし  
 った。後には母が谷に上田の団員としてい  
 折、その工屋先が生徒として入った。手  
 いふといふ。人生のこの子に何かないものか、

計6年間の富士音楽校(名称が変更)の生活も  
 終り卒業となった。音楽校が上田と北の  
 リラクスと一上田大音へ行くと。私はどうも  
 音楽校2年からは数学も英語も始めなした。金も  
 ないし、コネもないから就職も出来ない。ふと  
 思い出したのは、新宿で先輩の誘いで新  
 宿で美容院をしようと思った。そう  
 して美容院へ行くと、美容院は1年だから  
 何とかなる。新宿の2女子医学の階層に  
 いる。そう思った。先輩の美容院がとて  
 12の右の道もなく思われた。

女子医大の階層のセクシースクールは、  
 知人くらい、知人の人、20代後半から30代の

人、密生話の人とさきざき人う集りた。20年  
後半、30代の人々に「ソレの天下」とか私の知  
らぬ知識をおそわつた。

卒業は「カイホク」「史記研究」など立派な本  
の売つたが油断けほい。実習は「ユテ」「マッサ  
ー」のめいりまで務めたのになつた。実習  
のこの状態。その中で横田さんという同年  
会の人だいた。とて親印が実習の時相立テ  
ルをしてくれた。卒業が終るとか云う道に歩  
るミルカホーレへ行きミルカをあげつてくれ  
た。マッサーの折候風を「バスタール」「ア  
ニヤニヤ」などとプロセストしてくれた。

バスタールなど「アノ横」など特殊なところ  
へ行くといと手に入らぬ時代だ。

さて卒業するやどは就職しなげればなら  
ない。先輩のところはイレターと割居がな  
く信じて20年ほどとめるやむ。どこを見  
ても皆信じてや。つまり片断と子家だ。

ところがフーにわいんというに、上野の松原や  
の美容室にやする。朝10時から夕方5時半迄

心。実は横田文さんが現任の美容室(当山美容室)の面接の時、市橋と一緒にいって入居を希望、まゝとマスターと言ったそう。要するにフコクに入社出来た、~~新入~~出来たのは入居の名だった。

美容師のスタートライムだ。ところが身が重かたから私はマコマコがたばかり。先輩美容師は30名ばかり、幹部はそれぞれわけて即手をたのむが、<sup>幹部</sup>その即手の任事が少なかった。その頃のヘアスタイルはセミをかける候う。スズラセセシ、フニセシ、スエムセシ、カクセシ。任上せをた、幹部のそばに立ち居るの進行によりそれぞれセシをわたり、しかしセシを必要としないかわからず、たのむたものたをた、<sup>た</sup>と手をはるのけられる。これじや給料をたろと少々は居る、排除、たのむの沈黙をし、月50円をた。銀行の月給料5000円の増えだ。

信の専任から美容室の即任まで定期券500円、これじや足らぬ。そこでP

バケトをほじゆた。美容院が終りのが比較的  
 早いので家にかえると二-三日は一々をかか  
 る器具、茶液をセツトとして家を~~静~~肉にし  
 ぐ一々をかかす、一晩三-四人、夜かきりか  
 ぶる(床)にたか、たもしろか、た、その折、  
 「~~送~~風を兼ねて下之ればサ一ビスでバ一マ  
 かかす」というやり手だ、一般に居止の料会  
 が500円のところ300円でかかたサ一電機人  
 一々が元流で二-三日は一々かす、~~毎~~  
 毎晩のアルバイトは繁盛した。

美容院の給料は次の年か3000円、その年  
 とは分取の割にたつた。この時アルバイトに  
 役は立つた。お嘉村を早く正確に仕上げると  
 は二-三日は一々の毛を~~ま~~し早まら。この「り  
 イが」が伴同の年で早く分取の割の最初の  
 給料は8,000円つた。家にかえり母の給に一枚  
 一枚お札を並べた情はうれしかつた。相変ら  
 ずのアルバイトはしるごうい、やると世間並  
 の収入取りにたつた。平当にたのしい毎日だ  
 った。

アパイトのバーマも店内以外は禁止されて  
いる。少しゾクサメたにする。そのかわり店  
での着エダをあげてくれた。

5時早退は外は子どおし、上野の「しんば  
すの池」でボートにのり、夕ゴ景観を  
行ったり、若者らしくとした。

お子と母をさそ、て前通屋の「おのり  
子」に「しんばすの池」を見たりした。私と  
とつておのりのある日だった。

そしてりふらふらおのり(中央大学)の人  
達とキャバクラに行ったり。山手湖でのキャバクラ  
今の様子を軽く探して運のよいものごとく分層  
くさす。おのりふらふらおのりの男性が  
かついで探して行く。私達はふらふらでのこ  
はん。カレーを食べてた。

キャバクラのまわりを山の歌をうた  
いながら手をうたいでさわる。おのりふらふら  
ふらふらと探して「おのりふらふら、おのりふらふら  
おのりふらふらおのりふらふら」

おのりふらふらおのりふらふらおのりふらふら

ん、ワレダツオケルハ人たハ 渡辺之ん、右  
 屋之ん、鈴木之ん、石井之ん 多藤之ん、今  
 井之んハ西村之ん(現正屋之ん)のみ。  
 伊藤之んハ之んが、あとはあじうし之んが  
 ありう。我が青春の真只中だつた。

ある時西村さんから右屋之んに汽車で知り  
 あつた藤野之んとどちらがよいか相談をもち  
 かけたら、右屋之んは井之んの答にう  
 づ人がいるくらゐ、藤野之んは左のほう  
 だともないし困つてしまつた。

藤野之んは気象予報部で暇は志兵衛カシヤ  
 に行くとか (コカス寄)

兄送りの一筋に行つてほしと、竹葉カシ  
 橋から出る横うくら丸を兄送りに寄つた。

マ、その場で羊年か一年までをときら、

横が去て行くといふのはるか遠かよひもの  
 でホタルの光のノコギリが流れて、プがなぐ  
 らぬ暇の電の人と海岸の人がそつとともつ、や  
 がて横が去て行くのと、プがなぐれと流れる  
 ち。そんなことがあつたが、私の西村之んへの答



にたのりた、しばらくしてモラーメシヤ<sup>ナ</sup>と  
 来ない、どうしてのかな？と台詞をのぞくと両  
 形さんさつのだとブリんそばを合々いれてい  
 り、両形さんにはラーメを缶つていれたのだ。  
 案の定120円は両形さんの布とつとということ  
 だ。又あつた同じ人2人で「可きやま、を  
 しよるとえれえれ、<sup>「何、おき、</sup>「しよたま、と<sup>要持</sup>  
 ちつた、又両形さんの家だ、一人暮らしの両  
 形さんの家のあつたところ、すまじと「まろ  
 んい肉ね全部焼くのはもつたない」と「子が  
 やつとしつたところ、<sup>「おきもえんてんてん  
 ないわ下」</sup>とれもしつた、ほそほそとしつた  
 可きま、とあつたところ、

両形さんは相談可い人もなくおしか4世帯  
 にあつたところ、この古屋さんは朝は新聞  
 の記者さんだ、

この私 舞野さん少々うしろしめした。  
 67年に電話があわないというエピソード「そば、を  
 べいお4でろくに話などしな、人形をどわ  
 かいはずもない、美香の在りていポルトと

す、(店が由緒ありと大いそぎで「しつぎすの池」  
へ行く) 左平には仲間とラ-メ-をたべさ、  
至極幸せ目だ。

藤野さん 一年たつと「冠印がキ」 と「ミバ」が  
とつ、2人きりかんとしあひ。

私ははボ-イフレ-ドはいい方、交通を12  
の2人はいたが学校か乙結核療養所へ見舞の  
手紙をかいたのがき、かへた。康大を自由  
な整理、エスパー-の指導をしていの人だ。会  
つた事はないが文面からかゆいの執着を感じ  
る。いふをと思つていふかもしねない。

藤野さん そのうちに結婚といふように  
つた「弱、たな-」

康平の親戚は従兄弟太田さん(母の長兄の長  
男だ)母があふ物をしたり。私は従兄弟の奥  
さんのバ-マをかへたり。行来があった。そ  
の従兄弟の奥さんと母が居て12人のモ、  
ト開いて1人、左。「おげさんお子さん一人い  
な中お開いレラレ」 と母はそれの事  
あいな同意をしていた、左にたにた、とは

言ってくれたかった。

私はそこで決心をした。五月九日行こう。  
「結婚しよう、結婚しよう」というのがおれと結婚しよう。

恋をわすれた。

名古屋のヨメナリ支店は有名な、私のヨメナリ支店は敷布田一校、かや布田一校、新しい下着を買った。「マ、しし入ろう」「裾ののち、ワレが」の階段をのちろつた民族人形をたを果敢おしつたのからかや換採のフコシキはのころのひとおれえだ。何もないたの中むし家はこころだ。でもほら少し悲しかった。

結婚式の準備も自分でした。七夕心袋は裁からぬ、おのりばかりだ。着物は店長の着たのえんがしてくれた。かぶろも無研で売った。トイは同僚がしてくれた。自分で車を止めた。武場へ行くと、須賀神社、武の百と蘇野とんを知りあつた。就かぬで食事をした。中、呼元して兄弟夫妻お席してくれた。こころは岸野武

子に在る。

新婚生活は蘇野さんのお足さん宛の一通を  
かりての又文一通もじょう一通、押入れが  
一通あり、その中に布團はもろろん、茶、靴  
造入れ、そして履やご置、右洋服ダース、  
ミシロ、蘇野さんの手づからこの部屋に不  
りもの大きな電着、布団をしくらにせ、と  
の足で、手さし「赤い手ぬぐいアフラ一に  
て、いかにあるやんかおれに在る、」の生活  
それでも私は不潔は存、た。美容室へい  
ていそと返、た。

このお足さんの家業はつくば産製造、大き  
な糸の並ぶ紙業所、お倉のまわりほか右りの  
ついで、それこれの従業員のクヤ下がりして  
ある、原料のついで天いもを説くのに右き右「多  
」の中にもおあり、それを茶でおむ、横さし  
の足で、製品は人形所の「ちとせや」に行く、  
そこで敷着すよにやでなく、貸物所へおろして  
いる、私はそれ以来お一とつくだに、お覚べ  
たくなり。

才が終つ、古めと萩野の実家へあひさつに行  
 った、夫は島津家の六男で長崎の萩野へ巻  
 に行つたので、実家の島津さんへあひさつに行  
 ったのだが、比較的若い通り屋で、この実家  
 にもあひさが「アキナイ」をしていた。

角戸の千枝を並べると、これ、「メロコ」、「あが  
 たいコマゴマ」といふものがありかなりほこり  
 をかぶ、という。道路より家の外に飾りかま  
 だ。夫の長兄の家は「フスマ、かま、飾りかま  
 の飾り、長兄の奥さんは中二階の宿、屋根  
 軒屋かた、そこに一人でやむ、座敷には入  
 らないのだ。合掌も家族全員「カサブ台、をか  
 こむの、この機織は土間から座敷へこすめ  
 の「ふみ台、で合掌をやる。昔の下男の子だ。  
 男尊女卑の典型だ、よくかまして、いふと  
 不どろいとして、た。

不どろい、た軍の、こ、ちよつと新入とこ  
 があ、と夫の自転車のうしろのり行、た  
 矢は、美子の「オキナ、だ、「あつて一と、何  
 とやめんとか、とて、こ「モモ右印、という芸者

が夫をとも奪つて奥へ行く。私は一人ひとり  
 の之れを正座を（して）まつてゐる。結婚して何  
 日もたつたらしい事を知り又事か？と思うが、夕  
 腹もたつた事かつた。夫は自個を張りたいのた  
 蘇野家は今修繕業。何か場ちがいの計へ来  
 てしまつた。

でも夫はやさしかつたし、夫これをもとめ  
 と思ひ目々をたどした。何れともあれ夫は島  
 津役。蘇野家をあつたこの女を頭取のた、た  
 ららよつたかつて夫の事をや中亦や方さ。  
 夫がマーカ及島へ赴きすゝね存じ島津役、蘇  
 野家と竹芝カと隣へ送りけり。アイドゥを  
 送りたものた。

もう一つ追加のおどろき。母と夫との約束  
 で私の結婚は実家に送りという事。私は何  
 かの居も字と事まつてゐたのた。私はその通  
 りにし。おだこの時母正座が少からな  
 子、おだこのは方一とあつた。

最初のきざしは結婚式の後の日。夫へ去  
 した。と母と母が居へ来つた居あつたのた。



行動訓たつたのだ。そしてお金持つ奥持者の  
 だ、終戦前までにはだ、今のお金が必要なりだ、  
 父は終戦と同時に無一文になり、中八車の揚  
 子ものに家帯用品を売った様子もつたがやけ

石は水、その土女座は走り母とは最悪なりだ、  
 やめてその女座と別の暮らしをほじめていた。

新筆のお金銭をうばい、家産を二割してしめた。

お金持豊蔵のありから保つて、この夫婦、そ  
 れがたしなると最悪ななり、母は年中欠をの  
 のしつていた。言う人がいらないからうらうら。

でも不満は母の先達だ。長兄の園大  
 即伯父、八河の肉口の木通一の商店 従業員  
 の年令のいつた人達を七存りの「夕カラ木テリ」  
 に送りせ、おと通いも信じてみよいて毎日が子  
 子の勲第の務なりだ。桑太即伯父は「94の紫  
 端、と敗走の居、幸吉伯父は「喜舞舞、と兄  
 達がいて可憐かすれといふだ、栗原に柔二か  
 りはあつた伯父達ははいはい。

こゝで伯父達の事を少し書こう。

伯父達は終戦、つまり日本が負けたとて、

先日、8月14日の付の情報本が来たとき、  
 桑太印伯文と幸吾伯文は下記の著書をおき、  
 彼を一セキ買の家財道具、商売品を在在み送  
 のせて自分で運搬して引場が二乗といろ、  
 残留かいつぱいさうして、その運搬、一  
 運搬能力、その、そののであろうか、

その次多分、車はなし、自転車で之等の状況  
 運搬能力があるとは思えない、

九州に引場が五伯文運、幸吾伯文は半無相  
 手の字真様をとり、次に新しくしものを記入し  
 不満はいふ所より、販売能力のある方を経営、  
 桑太印伯文は引場がのほ、在彼で「ヤマ」運搬  
 をしたとき、長谷の岡太印伯文は皆引場が  
 あり土地を買いしめようと最終迄のやり、  
 とにかく日本人は全部引場がをしにせよとい  
 たり「リエック」一つで引場が二乗を

でも岡太印伯文は「ヤマ七かろす」と取り  
 だ「ガラス」やを運搬、

私は思う、何か一大事がなす時、どう  
 判断をすればよいか、やがともやはり自国

にこの<sup>か</sup>一善を全くと思つてゐる。奥を即  
伯父の事がよいか股ごまの伯父達がよいか  
私をどうしてかかちかちする。

さて自分の事にもどろろ。夫は避妊に協力  
してくれなくなった。理由はともあれ妊娠し  
てしまつた。まあ長!! 母の命令で姉に  
おそれた母の産婦人科へおれこりかた。  
有急もなく麻酔をうたれ手術。そのころ、デバ  
ーにはお母は未婚者のみかぢらぬいた。子供  
が出来れば当然セキをけいせはさる。つぎ  
り実家の住居には去来ない。という事だつ  
たのだ。麻酔が子に響く、といふ状態での手術  
結果。石田をあげてしまつた。手術後、たつ  
たりの食器がすべてつくろつた。そしてとろ  
とろを吐き出し、おなをいじりまわつた。頭がが  
かど痛く、両日のおちる部屋はうらめしかりた。  
夫には流産しかか、といふと言つた。その  
夫は夕べに、おしに行つた。おしは<sup>か</sup>おなをかか  
る。私は一人だとしつて思つた。そして  
て又次の日から仕事。私はアホでセキを

～ 匠の仕事を満足してゐた。

店を店にばとらう話のあり、夫も母も大賛成大賞へ来りしつた。噂し万回、30坪の家もろろん夫が出してくれな。夫も母も私のゆきん期待してゐた。

しかし、しかしだ、アノ平はあまの北道もなにか入もな。からつ風をいせめ、秀樹が全子に2ヶ月かつた。

逆の道、2秀樹の去る。去るは不安だ。なほおのあ回の橋を2はしたるな。全志院心をした。自分で入院の仕度をし、自分で車をふんで<sup>厚</sup>上野病院へ行つた。夫はと強中丹を来りてくれあつた。もろろん婦もだ。

なにかかたつろろ、ともらあうな此、ろんた苗の考をばもつ天い<sup>愚</sup>つた。

虫居とウジのハニ度と作験して左に想像以上の苦しむた。着てゐたお玉者がしほれどほどの汗、着が元を掃、ていかなか、なれはろのゆたおお子の手、天い<sup>愚</sup>橋にわなつた。

担当の医師が「お急か？」と言つてゐた。互がろ

私26才だった。全五女を赤子は抱きかかりの橋、  
でもよく私をのんびりくわてた。その子も美しいのか  
少しいちをなすに、ううた。

その年の母も香樹を可愛がった。その月夜に  
×れ2はなご母と妹と私と三人ばかりで、  
で王子様おたひ、私が湯舟（子供用のガス  
4つりの浴槽）に入れた。母ががーせと浴を  
ゆつらりさす。妹が座布団の上でがーせの  
バスをわきまをハシターを月夜 それ!!  
一の三で湯舟からあががーせの人々おたひに  
のせり。母をふくとすく「お、はひ」た。大人は  
皆汗多すぎ、香樹は可愛や。

長途の目程が、と一生懸命にたす。

~~5ヶ月の香樹と共に来た大室、~~

~~井戸を掘り事からスタート~~

私は産後純調がわるく産婦人科へ通った。  
た。でもセクスを要する夫、あそび「コ  
ーラー」をのむ新橋、と来た。今のココロ  
ー、とちがひ、米食の精力を減退させと物  
た。私は母の人の影響を考ふの子なか

た、せ、かく、笑、つ、と、乗、石、の、れ、い、と、う、思、い、が、あ、つ、た、の、お、れ、の、石、の、体、族、を、存、心、つ、た、し、ほ、り、く、の、肉、石、の、鼻、可、右、り、が、香、し、ほ、れ、て、い、た、

私、を、守、心、つ、た、う、は、~~殊、南、中、の、~~群~~、評、論、致、意~~、  
を、し、つ、藤、野、君、に、お、か、い、は、い、し、た、。、  
浮、世、を、た、ご、つ、と、い、う、つ、つ、の、所、  
自、尊、尊、心、を、傷、つ、つ、つ、つ、。、私、は、~~は~~、  
母、の、目、の、前、で、私、を、守、心、つ、た、夫、夫、。、母、は、た、だ、子、を、  
お、れ、を、見、つ、つ、い、た、。

や、か、乙、太、官、へ、行、つ、た、ま、が、井、戸、堀、か、つ、た、  
その、井、戸、堀、の、人、が、<sup>「</sup>た、ろ、い、い、~~あ~~、<sup>」</sup>と、い、ふ、不、満、  
の、用、意、を、こ、つ、下、ま、い、と、い、う、。、水、が、取、ら、な、い、と、  
も、い、ふ、。、ど、ろ、ろ、の、お、た、い、。、近、所、は、子、だ、ん、袋、も、  
少、な、い、。、舞、本、社、の、約、ろ、に、い、る、が、た、た、い、な、い、  
で、も、一、つ、一、つ、を、活、の、場、を、保、つ、て、行、つ、た、。

水、道、を、ひ、き、か、み、を、ひ、き、。、店、も、し、な、れ、ば、  
厚、い、。、知、り、あ、い、が、一、人、を、い、ま、い、と、こ、ろ、で、  
店、を、探、つ、。、何、と、無、謀、の、に、か、左、帯、を、し、た、も、の、だ、  
其、バ、に、乙、(太、官)が、よ、い、と、い、う、。、<sup>「</sup>あ、そ、ろ、ま、  
の、と、乗、つ、し、つ、た、夫、夫、。、本、当、な、ア、ホ、だ、と、い、か、  
く、店、を、開、き、や、つ、つ、い、か、な、れ、ば、な、ら、な、い、。

昭和33年11月3日に至り11月11日に開巻。今  
考ふと心なちろはがましい思ふ也。

その南居の日、向原さん、川崎から助午に  
来てくた。ボレヤリしていゝ私、彼女は下  
平に平と南居を連れあつてくれた。あつたうら  
ざいよした。

紅葉をしていくのは、秀樹を身己くわの  
人が必要也。母は大宮へ来てくわの事もある  
事知した。母は武蔵境の公園の妹と姉の3  
人でくろいゝた。母と父は結婚をし、家内事  
の家は売りそれを母にわしたという。あこ  
がれた、お団地生活。でも母と姉は折合が思  
く日々いさかいたそあつた。母は来ても  
らえは母と姉のいさかいてもなく、私のみ  
がかり。これでよしと簡単に考ふた。そ  
で母と妹は大宮へ来てくた。

どう見ても秀樹は可憐な子だつた。母も妹  
も秀樹を可憐に可愛がつてくれた。妹は心し  
この団員と言つてもしつては毎々。そのあ  
そり父が秀樹の若みやがて思つてくれた。

唇はホッラお丫丫の春足。昭和五奇のころ  
 の大宮は田舎だつた。バ一マは既に手始めに  
 そのせいで知らず知らずのうちに、ゆえめに  
 だ一マをかくすに次の日全員の字をいじりま  
 する。他者もく見をモッスリ、これがゆえに  
 山がゆえに唇は展来す。そしてモヤハア一  
 不水いんたに關係ない。これでは私の着るこ  
 の差と不音務の要おはくいぢから。どうし  
 たらお音務と意見が一致するか。毛を弄りま  
 いという年を馬一致するはがと思ひ、毛皮の勤  
 強を方々としてある。ところがどこでどうい  
 う強をもすればわかるまい。

もっぱら月二回の休日に香櫛をついで  
 毛皮に行く。又マヤッハ行くに足存じ3000  
 円の券を買、二回とも乗り物にのり、二枚を不  
 違は私のよろこびであつた。バ一マ3000円の券  
 知は子供の前でびり3.000—お丫丫を左へ2!!と  
 は思ふまい。そして二年は河原の母や妹と一緒に  
 「田舎」へ行つた。もちろん香櫛も一緒だ。  
 「お丫丫の尻」、「リッラズのアキ」、「湯のアキ」

「白くろしの肉」と何回も行った。他に行った所  
を知らず来た、右のかと思ふ。

夫は拙妻らで一年とか一年半の女展、かき  
つてくると水道が汚れたりガスが汚れたりス  
トーブ(ガス)が汚れたりと家の中がどんど  
ん汚れてきたのに不思議な目で見ていた。そし  
てそれは何より好意の出来た。

その昔場田さんの「お母さん お母さん」と  
言つたのと似た、又母も「元祖さん、六祖さん、  
といつと加えて「お母さん」した空気が流れて  
いた。話を聞いたとて思ふ。うすくしか  
ないのね。でも私はどうしてよいかわからない。  
い。あちらをたればこちらがよいが、その  
うすくは張へ行つてしらすのくりにして  
いた。

母は若い男を手取が中子のわうそい。

広告会社の「マ-4P2、シ24P2」(各司行  
知らずい)など毎日家へ来てお茶をのんで  
いた。土曜日の若い人や結構と世のつりした  
った。おのれおのれ夫とほろすくいかない。

香櫛が名をわけてまもないころ、夫の妾母が  
 なくた。すぐに徳松へ行こうといた。  
 既軍へ、アラスツツに金がある。通帳も  
 印も私にはあつかう、といふた。夫は私に？  
 うしろものをあつかうことはない。奇象へ  
 行き同僚のもと夫の机をあつかう。通帳も印も  
 見かけた。そこが<sup>(お金の)</sup>金をあつかうから徳松  
 へ行く。つぎあつかうのがおそいと夫  
 の長兄の長兄と不説教。しかも舞野の母が香  
 櫛の名前で香典をたてかえたといい、私には夫  
 の名前のことしか考えないからあつかう  
 て、香櫛の名義の香典しるしをかえした。  
 夫は全面的に私を信用していいことを知  
 る。とにわくあつかうのがおそいといふこ  
 とは表面に隠してすつた。墓式には用ひあ  
 ったのだがー。

水道甲がすてひく9日市会議員のお自慢子  
 入りとし、一緒に行く。お母の力が大、電柱を  
 台に我母に作らるる、た「9リ」を小まに「バチ  
 ツ」に入ら「ハチ」の手が子の名を「マ一ヤシ」の

「アトにイ」の後の「り張、アトにイ」など「行  
も言ひなかつた。そうい、丸筆も言、丸筆が  
よかつたのか、今ごろ考えても仕方がない。

松坂やほかの不言翁の多い秋葉屋しなかつた  
ら、なごの電氣屋でスレーブを買い戻すの事  
場のイスに「アトにイ」を、とそろえ、一年ぶり帰つ  
て来た政大翁がとんとん変化していつたか  
おもしろく存かつたか。

クリスマスに訪クリスマスツリーを三回  
かざり天井には正一ルビカサマニこれを包む番  
樹が「きれい」とはじめての言葉おぼえといふ。

12月の25日の夜に存とこのクリスマスツ  
リー」を片が4枚正月用にかべに「<sup>陽</sup>正」と正一ル  
をばり母の散ち甲乙と二人座のイキ一に正  
とじをし、<sup>た</sup>夏が迎がくと秋葉屋で人工のヤシの  
華を買い戻す「おつちせん」をのせる。  
一生懸命たつたのか、顔おもしろく二人たつ  
た。

大官へ来てから夫が給科もろ、といる  
別々不満はなかつたか、食べたものは一生楽

命に在る。持神のコーンド液をとり 上野の  
節所の「アキガキ」へ落す世に覺ゆる行つて  
ら、女 母と妹と三人即の居た、女は、

也か「お子玉の親は何か!!」 「お子玉の妻は  
何だ!!」 と両方かきせけりしと扱ひたり。手  
に お子玉く 2姉に母を引きとつて居る。と  
夫がたのみに行くと、答は「—」

親はどうかしら? とないう歌で居る女がわか  
らぬ、母からは「別しろ」の日々。

娘は在る、今母はいたるに在ると香林を包てく  
れ、人々に在る。諸姑し下ろと果て来ん  
答へる。 「もう一層やりなすろ」とい、答を賣  
群に在る。 じむひらく「yes」 と親はひと  
困つてしすろ。 『そし行き「おしろ物」を万方め  
ろれと力入。 一層はえんといふとそろど  
可かといふがらん境。

自分が言いたしとてごめり困惑の因り、  
夫はほとんど家い帰らぬ深山の奥に在る  
ごめたり、 活しあるやせしるもなれし  
はる日か可かとい、女 一層は夫と妻めたり

流しに老母送去果てた。

せがで離婚成立、市橋武子に在り、武子も秀橋と手早く別れ、

離婚の折、土地を買、お新余30万をかける。稼い少れり。折は借金をして30万がえり。

川崎重工業、小西線などの株の事は私は何も言わな。秀橋と交すもこれ程にばえり。今迄と同じ株に印付けばよい。何と云った嫁が養育費つて在るか、在り？といふに在り。土地を買、そのを返せといふ人の養育費をばえりといふ事、在り否らう。

心のうちには淋か、在り。結婚しよう、結婚しよう、と言つたのは何故か、在り。在りか母と9割を子ととりもつ事だ去果てた。

それはい、自分で印付けば金を2万円。

生活面は、死くおんを7万円、白菜を7万円、う、おや梅酒を6万円して積貯、服は秀橋の物も自分の物全部6万円。母が起用たのて秀橋のスーツなど6万円、2万円。

字原は母の借、おスーツの返納は在りた

かゆい。

そのころの私が家の流行病にシシで自分の  
脚をつくること、歯磨き粉は一本中をのむ、

香櫛は母から妹からも可愛がられた。

毎日の孫に乳さうりの「やあつらえん」が来て母  
が買わねえとてえうけで買う。年和を白くたつた。

よん事といろのはるんつづかない。唇くつ  
づかせる牙法、あゝ意味での「コッ、モ知うぞか  
つたのだ。

常と一息してあつた。しかし差へのやべ  
ての家の中箱に入れ自由は保つていた。が  
どんぶり勘定ではよくないと思ひ妹に給料、  
母は毎月500円とアラス着は料舎としたのだ  
それと家計費「サイツ」に入れたところから繰り  
引けた。母は着るに入らなかつたのだ。私に  
それと着が「あつた」た。だんたんと不意嫌にな  
つていく母と私はずるで原因がそこにあると  
いふ一とこれたかゝる違着がなつたのだ。

以上の命にたつてゆかるとして、私は自分  
が経営者のつもりになつていった。母は2のホ





3)

私ハツと気がついたら、このまゝでは養死を  
おちつころ、おちつころ。

しばらくこの母と妹が家をとて行つた。

妹が家の掃除をしていて私の「移転しよか」

家の甲けがうととあった。夕と入をの4を

あてにり夕ボコリがあつた。私はこれを出してへ

たふたと~~解~~の2し子、た。「母と二人で協力

してや<sup>すわ</sup>の行つと」と秀樹が言つてくれた。

甲をのりる後ほどおぼがけはげ子とれたか

布目も持つていかれたのでその~~今~~の~~今~~養子もつと

吾崎やに買ひに行つてもつとめえつて来た

秀樹は本当の私をたあけしてくれた。夕食の

買物も持つてくれた。居の手伝もしてくれた。

口ツトのゴムをていねいに~~は~~存在と正確

にやつてくれた。母が三日不病院へ入院した

時お洗濯物を取り行つたり着ぐるをといつた

り。副食を運んだりしてくれた。大に方かり

だつた。ある時本院中の母からトイレに行き

たといと子レリ私はお急をこしり、2茶つて行

つた。「おうね、とんで来ようよ」と入院中の

人に言、た。考えを二つあるデレのあひだ  
で行けよと。看護婦さんがついでに、私は  
するぞおもちやが。私のこゝろおななめ。

後にな、二講習をやる格になつた時、夜の  
12時やし時ごろ大官に着いた時(軍がいつい  
いでつかつかのわたい) その日の秀樹が駅ま  
でむかえに来つてくれた。

その日はたんだんじり食になつて来た。秀  
樹に美容師が来るに同室むまになかなか  
と来る。必死に髪に力を入れた。髪を  
のびたためが中々こゝろが来た。先髪に力を入  
力強会へ出席。東大の薬科大卒の大川先生が  
知人くまの受講生。先生は黒板に化学記号  
でかき、それをうつしていきと話が始まる。  
話を聞いていきと黒板の記号がわかる。こ  
れも化学に弱い私。次の年も(皆一年で卒  
業して行く)受講。すると大川先生が「君講  
師じゃないか」といふので、そんな事した事な  
い私。「どの格に方2のどの方か」といふと「お  
しだ) 2つからだよ」の返事。そこからは

ズレ、ブクワ講師の養成など存<sup>本</sup>在<sup>本</sup>の事  
からスタート、私と同じように大内先生の声  
をかけるお友人達、ほとんど否<sup>本</sup>皆<sup>本</sup>男<sup>本</sup>物<sup>本</sup>に<sup>本</sup>な  
り<sup>本</sup>は<sup>本</sup>お<sup>本</sup>く<sup>本</sup>ら<sup>本</sup>の<sup>本</sup>若<sup>本</sup>い<sup>本</sup>人<sup>本</sup>だ<sup>本</sup>つ<sup>本</sup>た。(お土、山口、桑  
原) 皆<sup>本</sup>い<sup>本</sup>と<sup>本</sup>く<sup>本</sup>せ<sup>本</sup>お<sup>本</sup>友<sup>本</sup>に<sup>本</sup>く<sup>本</sup>せ<sup>本</sup>お<sup>本</sup>あ<sup>本</sup>る<sup>本</sup>人<sup>本</sup>達、<sup>本</sup>が  
ん<sup>本</sup>や<sup>本</sup>り<sup>本</sup>は<sup>本</sup>知<sup>本</sup>ら<sup>本</sup>な<sup>本</sup>け<sup>本</sup>た、岡田<sup>本</sup>さん<sup>本</sup>は<sup>本</sup>大<sup>本</sup>内<sup>本</sup>先<sup>本</sup>生<sup>本</sup>と<sup>本</sup>い  
ら<sup>本</sup>い<sup>本</sup>ろ<sup>本</sup>実<sup>本</sup>験<sup>本</sup>を<sup>本</sup>し<sup>本</sup>て<sup>本</sup>い<sup>本</sup>た、

その頃の美容業界はデニキのパワーがエッ  
ー<sup>本</sup>と<sup>本</sup>ビ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>マ<sup>本</sup>に<sup>本</sup>な<sup>本</sup>り<sup>本</sup>つ<sup>本</sup>り<sup>本</sup>保<sup>本</sup>甲<sup>本</sup>筋<sup>本</sup>の<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>ビ<sup>本</sup>液  
は<sup>本</sup>目<sup>本</sup>に<sup>本</sup>か<sup>本</sup>り<sup>本</sup>筋<sup>本</sup>PH<sup>本</sup>9.4<sup>本</sup>くら<sup>本</sup>い<sup>本</sup>だ<sup>本</sup>つ<sup>本</sup>た、どうし  
も<sup>本</sup>毛<sup>本</sup>を<sup>本</sup>痛<sup>本</sup>め<sup>本</sup>て<sup>本</sup>し<sup>本</sup>た<sup>本</sup>ら、大<sup>本</sup>内<sup>本</sup>先<sup>本</sup>生<sup>本</sup>が<sup>本</sup>佐<sup>本</sup>野<sup>本</sup>研<sup>本</sup>の<sup>本</sup>2-  
ヒ<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>液<sup>本</sup>を<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>リ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>キ<sup>本</sup>レ<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>(<sup>本</sup>在<sup>本</sup>界<sup>本</sup>で<sup>本</sup>は<sup>本</sup>い<sup>本</sup>じ  
て<sup>本</sup>)<sup>本</sup>を<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>く<sup>本</sup>つ<sup>本</sup>た、<sup>本</sup>44<sup>本</sup>

キ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>キ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>キ<sup>本</sup>は<sup>本</sup>大<sup>本</sup>内<sup>本</sup>先<sup>本</sup>生<sup>本</sup>の<sup>本</sup>発<sup>本</sup>明<sup>本</sup>を<sup>本</sup>発<sup>本</sup>販<sup>本</sup>  
する<sup>本</sup>際<sup>本</sup>が<sup>本</sup>は<sup>本</sup>い<sup>本</sup>じ<sup>本</sup>た、<sup>本</sup>右<sup>本</sup>、

私<sup>本</sup>達<sup>本</sup>講<sup>本</sup>師<sup>本</sup>の<sup>本</sup>知<sup>本</sup>事<sup>本</sup>は<sup>本</sup>理<sup>本</sup>美<sup>本</sup>音<sup>本</sup>師<sup>本</sup>の<sup>本</sup>レ<sup>本</sup>ベ<sup>本</sup>ル<sup>本</sup>ア<sup>本</sup>ッ<sup>本</sup>フ<sup>本</sup>  
と<sup>本</sup>佐<sup>本</sup>野<sup>本</sup>研<sup>本</sup>と<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>リ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>キ<sup>本</sup>レ<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>リ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>の<sup>本</sup>発<sup>本</sup>明、  
販<sup>本</sup>売<sup>本</sup>れ<sup>本</sup>た<sup>本</sup>け<sup>本</sup>ら<sup>本</sup>が<sup>本</sup>目<sup>本</sup>的<sup>本</sup>だ<sup>本</sup>つ<sup>本</sup>た、<sup>本</sup>ま<sup>本</sup>ず<sup>本</sup>は<sup>本</sup>先  
験<sup>本</sup>の<sup>本</sup>成<sup>本</sup>分<sup>本</sup>取<sup>本</sup>り<sup>本</sup>互<sup>本</sup>ち<sup>本</sup>か<sup>本</sup>ら<sup>本</sup>損<sup>本</sup>傷<sup>本</sup>の<sup>本</sup>原<sup>本</sup>因、<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>ス<sup>本</sup>は  
今<sup>本</sup>時<sup>本</sup>向<sup>本</sup>を<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>ス、<sup>本</sup>そ<sup>本</sup>の<sup>本</sup>上<sup>本</sup>も<sup>本</sup>キ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>キ<sup>本</sup>レ<sup>本</sup>ト<sup>本</sup>コ<sup>本</sup>ー<sup>本</sup>リ<sup>本</sup>

その地単巻のものトリートメントクリール  
 中のものコーンに酸欠とやらのもつと秀親多  
 所だつた。

店がうすくいかなう時、「のんん」や「ゴ」を  
 あんたり。果てレフのカバー活つたりと12  
 11日が大内先生の伊岩工会の記事がはじまる  
 とそればかりでよい。しかし私はほかに記事  
 番のよさあり。知識があり、これも講義力が必要  
 だ。「あつしや教員」へ夜間行く二とにこた、  
 初級中級上級。インストラクターコースと約  
 一年はかかる。その時々の時のアーマを級一  
 年ほどある。話を一分年ほどとけのあむの  
 かし。講師によつても内容のありやちが  
 がつまる。とほかくインストラクターコース  
 が終り、試験の日が近づいた。

その時やがた不わちの通知。三月の寒の日  
 だつた。蝶がふむ春旅の日を前にこつて一  
 を買つてかえ、たうトイレでたふれこいたと  
 いう。おひきの盆やかしの食器がちあか、  
 あり食卓中氣持がわらふトイレへ行、たのた



しい。病院へいそいで、泊りあつた。それから  
うほとちと母はちかくなつた。(70才)

学校を出たとき、母はさびしう、大分な自分  
の将来を戻しなげつた。おぼろげな子  
のころのち。

埋蔵の柳のゴーとゆうんをもちかへつた音が  
あつた。宿屋の音がしげらうりやあつた。  
死ぬか喜ぶかの。としりしり思つた。人は  
灰になつたか。

私は「はな」を校舎のイレストラウターに  
あつた。その頃あつたイレストラウターは4500人  
あつた。その仕事はそれだけの。

しかし草花の毎日きつた仕事をもつた  
た。それが勉強になつた。平均知人くらゐの  
生徒に「マ」の話を一分〜半分してまつた。

予鈴として50秒のベルを鳴らし一分で又鈴  
を鳴らし、知人分~~の~~の二メートルを走つた  
く。頭の中は必死の<sup>次</sup>回戦。それを先<sup>の</sup>の  
かい、ときりつた。それが一年以上つづ  
た。夜の仕事をほとんどたつた。便所の子





路を借してると、2階ヨ部屋をかすおかしな。

ところがサウ地は選りわけでない。今の家を  
 せよお、その前引越さなければならぬ  
 お香梅の藤混士にたおとなりがありついで  
 でおのんでサと交渉してくおた。何と「奥で」  
 という事だ。た。実際家を是に行くとおたが  
 がない。水道がない。でもおりおたの語、さ  
 、そく引越。サとボールの物を入山管号をフ  
 42何が入つていゝの記録あり。香梅が皆ア  
 つておた。夜やすおたは根をわらしそて  
 ねる。しばらくおらぬ水をしてたが大妻の  
 水道を引く。もちろんおたがあればある。  
 昼間、笠原ビルで夜は龍岡旅館とて、一軒一  
 軒の居の存在をしろ。朝、三橋之におら、モ  
 二二が、おら、そして「今日お龍岡旅館が終つて大  
 官の着しおは何様かお、おとんどおたの  
 う一階の内が、大官の義と三橋さんのお  
 平、おたの事務所へそこを屋根おどうし  
 か、おたは了、おたは了、お行く。8月か  
 りおたの道おたが、おた、おた、おた、おた。今度お

自分の家にもどる引越。ところが引越の日まで家が完成してない。横の空地にシートを引きてそこに荷物を引越を囲田之ん、海の家を手伝ってくれた。海の家？って実は名前を聞いてる。笠原ビルでアルバイトをしていて入居、その海の家、何を感ちがいてその水白のステールに自分のハレヤング、マッそろと乗って来た。そして荷物を降ろした時、ボロボロのうしろが「ビリッ」とやぶれてしまった。奪取してあげてくつもソーイングがどまらぬかかわらなうおしりの方まで手伝ってくれた。

そして南居に一軒、お赤飯と20mぐらいのエビのブリをこれしか用意がおもいっかない。三橋さんの1mぐらいの大きなお赤飯のエのボードの差、入れけ助かった。建築工会の講師、近所の茅葺式田舎夫妻、が来た。お赤飯が居る、マッとビールとコップをささね、背中をボロボロとおしりくつを移す。お赤飯の孫どれだ、お赤飯か、お赤飯一居南居に一軒、お終った、どうやっ

て片が午をいふかといふくは、日のかき居るま  
 一しと、

大川先流から何路地ワールド流、激り22  
 なじさ、可右、2必要を物をまらつた、

大川先流から下きな時計をいふた、

お断さんお断さんお断さんお断さんお断さん  
 袋、それそれいふた、お断さんお断さん

香榎は香榎、香榎を置換する、お断さん、  
 車人、お断さんの三春面談、お断さん、お断さん  
 い、香榎が「お断さん、僕さめ、お断さん」と、自  
 律していふ、お断さん、

夜のお断さんの紅筆の折紙、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、

香榎の任事、お断さん、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、  
 お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、お断さん、

約 階級にありながら、下駄げきの靴下を  
 なし。 3つの靴履を区別の2つを左の  
 し、台所。 トイシをふいと大乗だつた。  
 大工さんの両目2人が「こゝろを最知か  
 言つて、とれぬれつた。

でもこれで2階建の我が家が出来た。 南側  
 には、甲矢が香林の郵便、私は北側とな  
 る。 今年1階のセメントで下りたが  
 2階は冷暖房がない。 スリープ冷房を入れた。  
 今思ふと月が不十分のいろがしを若  
 かつたうと乗るのころ、<sup>私</sup> 残るなりだ。

いよいよ本格格的に講習の仕事がはじまる。 左  
 北海道の大通り公園（札幌）よくおぼろしい  
 3 月3日の雪どけの時、ぐちゃぐちゃの道  
 路で困った。 困ったといふば盛岡へ行つた時  
 だ。 お年よりが<sup>雪</sup>道をスダスダ歩いていら。

私はハッパリ<sup>雪</sup>腹で可べらないうち、と歩い  
 ていら。 あとでわかつたが靴の裏がさがら。  
 靴の裏のみぞが深い。 私も札幌で雪国軍の靴  
 を買った。 場所がちがうと怪甲ち2ものち

この夜、その盛岡にはずいぶん経たぬ  
の糸も鞍の工部から「夕する 7号」の3.

感心したのはこの夜行急車の温厚の調節の  
又土は、いつも下層より。しかし3段目しか  
市船がとれが直すつすの階級をのぼつた  
善己のベットのちどりつくと頭がつかえそ  
う、中は50mほど落ちたに換へるにがつか  
えが一晩にこぞすどりのだ、戻元にカベを  
置き夜の旅がはじまる。急車のゆれ、音のた  
び目がさめら、どこかの駅を通過かす二層、  
尖がそぶし、でもねむつたうしくしげろく  
すりと盛岡への案内が流れる、いろいろのベッ  
トを下り口をゆすぶるに、少しおそるな  
とんでいっばい、だから大いそぎだ、廊下か  
う外を歩くとゆすぶるの銀右衛門校舎の  
赤い窓をながめら、もうすぐ盛岡に着く。

盛岡の駅は人々ぞいっばい、改札を去ると  
ガレマストーブが赤々ともえそのすめり  
レガムにイスがあり、これからどこかへ行く  
人がそとをわたりすす荷物を持つ、イスはか

ていふ 母とんどがここからゆきに行くとい  
 ち、母はそれをいふに戸をさしぬき、荷  
 物の中から、おんぎり、つゆものき出しの食  
 べといふ、「これくうかい？」と私にすめめ  
 くれ、私はそのおんぎりやまのじやうを  
 り、と食べ、おいしい、そのおんぎりが  
 られしい、やがてその人達も次々と去り、行  
 く、その私も五つおんぎりを市内のホテルへ行く、  
 北上川をわたるとホテルがある、そこで  
 北極星をかり身少くろいをして主催者の事務  
 所へ行き主催者に一緒に会場へ行き仕事は  
 じやう午前十時ころ午後五時まで、そして  
 夜へもどり二つ報告を置く、一つは自身のため  
 も一つは事務のため、又「おんぎりのき」に  
 乗、つかえる、どういふ少くろいの手仕事は  
 冬が多かった、東北では「小岩井坂場」へ行くと  
 二つがある、左子右子境内におき、Xに2の管  
 業マシと「小岩井坂場」の「カマクろ」で食事をし  
 た食料といつても永くおんぎりを「カマクろ」の半  
 やくで、カマクろ、の天井からボロボロとつ



どこそこのあーのう立ろががあししと事  
と秀樹、「どこそこのレストろとがあししと  
言つてよ」といふた、左しかんろろた、

その秀樹、後娘の世を調整して、遠  
いのが秀樹がのそむ利が迫しにはなかつ  
た、春宵朝が来た、「合格をもし、それを持、  
と秀樹いふたしたろ、~~決~~決があおれと来た、す  
と秀樹、「そろろ~~決~~決<sup>決</sup>肩をたたりとよと中、  
たと言ろのよ、彼は現より大人、年の子供  
だつた、それかろ、親子別々の生活をする、

その頃大内先が建省士の会費をたのめ  
とんたろ、スロとサーの人口スの給料が60万  
それでは足りまいからとのこと、あされた、  
その頃60万はせりの金額だ、しかし大内先  
は借金を毎月100万かそこを切ればならな  
い、だつたら、人口スの社長はろろ言ふ、  
よいと私は言つてしよ、た、唐には毛髪を  
あそを全部額欠と来たの、~~後~~後とて、  
いふた、た、そと大内先をにっつとせめと  
いろ階師とこの子、仕事をつた、か又はたろ

を欠くと皆さすかすか、私に比喩をうけてみ  
るとなる。

ところが大内先生、2人の言葉にフッとた  
けが返し新学術を考へてきたものとして自然  
とあしきくくれた。鬼人である。でも人間とい  
うのはオーストラリアのようではない。

はじめの経典学会の身一回の全国大会を行  
った時のこと。会場は大阪のリバーサイドに  
あった。うはだつた。大内先生の部屋に美谷老師  
が来た。かやの「部屋の人々でいけば、大  
内先生は美谷老師のあそびのあそびだ。中国語の  
芸術家同士の「どしどし」がやわらかく實際な感じ

田部井先生の同意、夫毒だと感じている。

笠原ピルの折私に屋内をめぐり幼少記憶を  
行、<sup>(笠原)</sup>「この部屋に「大内先生か?」と聞  
きか来た。銀座のピューリースクールの紙  
音の先生。「下の喫茶店に定食をとりまわ」といふ  
その時と翌朝のハヤヒセキセイイこの折を  
しう、横、かやりの津めが場所が来た。「ど  
うさすとしよう」「大内の家内では、一語に信

んどうの日勤共々して何? 一冊のうき  
わきものの三人の世話が乗って何? おど  
ろくより感心してしす、右。

大内先生は7日迄の夜、皆そそ思つて  
る。7日迄も今日以上の疲労がありながら  
ゴロとでも羨望師匠のこたれていま

私は筆跡も乗る、とは言うものの、自己  
ナリナリ、「ボダイウヤク」など大内先生  
を欠く事な。

そのころ岡田先生から決断を強要の教授の  
宮橋先生を紹介され、宮橋先生は人格者で、「そ  
ほど簡単ではあか、とろ回さぬと答へるぬ  
ことだわ」と教える事な。むしろ深く知り  
いと答へ出ない。とて勉強強にす、右。定期  
勉強会では足りが先生の自完でマニーマ  
ニで教えるもす、右。子地秀樹先生に右の  
で筆を送り迎えてしるもす、右。色紙10張か  
ら夕方4時迄、右のに字や右も既の二つ  
いなり。これにより私の講習のレポート  
が来る、右。毛髪、買办、従業員教育、おか

で建築士会へ来り仕事の多いの仕事がとて  
 の務に取った。屋内地障から分断迄が5万円。  
 夜は約3時間です。そしてあそび  
 一層が4100円の給料。うんしかつたな  
 (このおは50円くらいだ) )

仕事で遠くへ行くとお子やが(白気)を穿  
 くとある。

北海道では「ヒリカキ」かなり重くも  
 たかものともせず「環ちか」です。そして北海道の  
 「アサヒ」のデパートで「コトコト」64、11、12の  
 花柄の「ライカ」64、浮世では自分の身長  
 ほどの「オークとスガール」コーラーのびん  
 を元々作、た「ライカ」32、64。

そんなところかな。部長の「ゴ」234。  
 やらうと物がほしか、た。

家の甲をアール又一木の橋を<sup>界</sup>にしたら  
 った。ルノアールや2トりの花は絵も<sup>階段</sup>  
 うつげいにかさ、た。デコレーションさん  
 「カニニョール」の絵。カニくず箱もデコレーション  
 2、とにかか<sup>ま</sup>しいものをかきあつめた。